

【報徳像について】

白鳥小学校の正門を入ると、すぐ右わきの花壇のなかに、薪を背負った二宮金次郎（尊徳）の石像がある。

その台座の壁面に、尊徳先生の「報徳の教え」が刻み込まれている。



【昭和31年11月3日に建立されている】

昭和三十一年十一月三日
学校長 杉浦久雄

年々歳々報徳を
忘れるべからず
至誠を本とし勤労
分度推譲の様式を
立て一円融合の生
活に入り永安の道
を開くこれ報徳の
教えなり

「至誠」を根本におき、その上で「勤労」と「分度」と「推譲」を行うこと。

- 「至誠」とは、役立つことを進んでやろうとする思いやりの心
- 「勤労」とは、熱心に働くこと。人は働くことによって向上できるという考え
- 「分度」とは、自分に相応する生活を送ること（贅沢を慎む）
- 「推譲」とは、働いて得た余分を家族のために貯えたり、他の人々のために譲ったりすること

自分の利益や幸福を追求するのではなく、他人や社会のために働くことで、円満な世の中になり、繁栄につながるのである。

薪を背負った二宮金次郎（尊徳）の石像が多いのは、勉学に精進すること、人のために尽くすことの大切さを知らせるためだと思われる。

実際には、金次郎が、薪をたくさん拾い集めてお金に換え、油を買い、夜も勉学に励んでいたようである。

御神輿について

「巻藁御神輿と裁断橋模型」

玄関に入ると、右の写真の模型がある。
熱田祭り・堀尾金助祭りの祭礼に伝馬本町の御神輿として活用されていた。郷土学習の貴重な資料である。

【伝馬本町町内会から寄贈】

※ 巻藁について

毎年6月5日に行われる熱田祭りに東西の門には、それぞれ2基ずつ、南門には1基の「献灯まきわら」が置かれる。

1年の日数を表す365コのちょうちんでおわんの形を作り、月数を表す12個のちょうちんで中心の部分飾り、1年間の健康を願う。



扁額について

「阪本 鈺之助 扁額」

体育館に入ると、正面左よりの壁に掲げられた「内正其心 外修其行」の扁額がある。

これは、7代目の名古屋市長 阪本鈺之助氏が揮毫されたものである。

「内其の心を正し、外其の行を修む」とは、
「内では心を正し、外では正しく行動し、身に付ける」という意味。

※ 阪本氏について

明治44年7月から大正6年1月まで名古屋市長に就任された方。

※ なぜ、白鳥小に掲げられているのか？

昭和10年の教育会長であった富田彦吉氏（名古屋市議会議長）が全市でも唯一の鉄筋教室の竣工記念として、阪本氏にお願いし、書いていただいた。



道標について

「宮宿道標」

寛政2年（1790）に立てられた道標には、
東の面に「北 佐屋津島 同 美濃 道」
西の面に「東 江戸かいどう 北 なごやきそ 道」
南の面に「寛政二年戌年」
北の面に「南 京いせ七里の渡し
是より北あつた御本社式丁 道」 とある。

※ あつた御本社式丁とは？
熱田神宮本殿まで、二丁（町）の距離という意味。
1町は、今の距離で約109メートルぐらい。

※ 「北 佐屋津島 同 美濃 道」とは？
これより北は、東海道 佐屋路（宮－佐屋－桑名－津島）と
中山道 美濃路（宮－岐阜－大垣）。
佐屋路（佐屋街道）は、桑名までの陸路。七里の渡しの迂回路として盛んに利用された。
悪天候のために渡し船が出ない日や船酔いをしやすい旅人たちは、この陸路を利用したと言われている。



馬車の停留所について

「馬車の停留所」

明治11年、高村藤平が代表となり、乗合馬車（定員6人）が経営され、
神宮西門（当時は鎮皇門）から本町通りを大須まで運行された。

この馬車は、今の熊沢医院の前あたりから（現在写真のような石碑あり）
大須観音へ向かっていた。

大正の初めころ、付近は、大八車で荷を運ぶ飛脚や、運送馬車屋のたまり
になっていて、一膳飯屋、うどん屋、カンカラ餅を売る店などが数軒かたま
っていました。

（『開校百年 白鳥』 より）



※ 石碑の正面には、「白鳥御陵 是西二丁」、側面には、「愛知共同馬車會社中建」と
「明治三十七年五月」と掘られている。

一丁は、今の109メートル程度である。白鳥御陵とは、現在の白鳥古墳のこと。

※ カンカラ餅とは？
あん、きな粉、ごまなどを餅にまぶした食べ物。

船頭重吉の碑について

船頭重吉の漂流について

文化10年(1813)10月、船頭重吉は尾張船督乗丸の船頭として、江戸に向けて師崎を出航。11月、遠州灘で嵐に見舞われ、舵を折られて漂流。

文化12年(1815)2月、漂流を続けた17か月後、イギリス船ホーストン号に助けられた。

その後、カナダ、アラスカを経て、根室を経て松前へと到着したのが、文化13年(1816)9月。

その後、江戸で取り調べを受け、文化14年(1817)4月に尾張藩に引き渡されて、半田村に帰りついた。乗組員で、生還できたのは、14名中わずか2名だった。



「船頭重吉の碑」

重吉は尾張藩から名字帯刀を許され、小栗重吉となり、御水主(おかこ)の職を得るが、2か月で辞職し、漂流によりなくなった乗組員の供養に余生を捧げた。

文政7年(1824)頃、著作「船長日記」(ふなおさにつき)を売り歩いたりして得た資金を投じ、台座が廻船の形をした慰霊碑を笠寺に建立したと言われている。

慰霊碑は、嘉永6年(1853)に重吉が世を去ってから放置されていたが、同年成福寺(白鳥小学校の西側にあるお寺)へと移設された。

帆柱の部分には「南無阿弥陀仏」の文字が、また台座には、なくなった乗組員の名が刻まれている。



成福寺



船頭重吉の碑

※ 御水主について

「水主」は「かこ」と読み、船乗りのことで、「御」がついて「御水主」と呼ばれたのは、藩船の運航に従事していたからである。

徳川家康幼時幽居地について

徳川家康幼時幽居地について

松平竹千代（のちの徳川家康）の父・広忠は、三河に勢力を拡大する織田信秀（信長の父）に対抗するため、駿府の今川義元への従属を強め、1547年、6歳の竹千代を人質として差し出した。しかし、岡崎から駿府へ送られる途中、竹千代は、田原の領主・戸田康光により身柄を奪われ、織田氏へ送られ、熱田の豪族 加藤図書助順盛（かとうずしよのすけのぶもり）に預けられ、幽閉されることとなった。

1549年、8歳の時に織田信広（信長の異母兄）との交換で和議が成立し、一時岡崎に戻ったが、すぐに今川氏の人質として駿府へ送られた。（「新修名古屋市史」第二卷第六章ほか参照）

熱田区誌には、「1603年、家康は加藤家に140余石の土地を与えており、これは、人質として預けられた時の厚遇に感謝していたものと考えられ、家康のこまやかな配慮があったもの」という旨の記述がある。

当時の建物は戦災で焼失し、現在は、石碑と表札が存在している。



石碑と表札

岡部又右衛門家跡について

岡部又右衛門家跡について

熱田の大工棟梁・岡部又右衛門此言（おかべまたえもんこれとき）の屋敷があった跡とされている。

岡部又右衛門家は、代々熱田の宮大工であった。

- 1560年 桶狭間の戦いの頃、信長に召し抱えられる。
- 1573年 5月 信長の命で、長さ三十間・幅七間の鉄甲船を建造。
- 1575年 5月 熱田社八剣宮の造営に携わる。
- 1576年 此言（これとき）・此俊（これとし）父子で安土城天守の造営に携わる。大工棟梁を務める。
- 1582年 本能寺の変後、織田信雄に仕えたらしい。

此言の孫、宗光は京都大仏殿（方広寺）の造営に当り、慶長十四年(1609)より名古屋城築城にも携わったという。

現在は、熱田神宮の南西辺り（国道19号線沿い）に家があったことを説明する表札が存在するだけである。



国道19号線沿いにある表札